

平成 31 年 度

人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース

推 薦 入 試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は、表紙を含めて全部で 13 枚、そのうち解答用紙 2 枚、問題選択調査票 1 枚、下書き用紙は 1 枚である。
試験開始の合図があってから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁などがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 問題冊子に書かれている解答上の注意をよく読んで解答すること。
- 4 配布された問題冊子は、解答用紙・問題選択調査票を除き、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
30.11.28
富士大学

平成 31 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

■解答上の注意

- (1) 問題 1, 2, 3, 4 から 3 問選択して解答すること。自分の選択した問題を、問題選択調査票に記入して提出すること。
- (2) Web で調べるものには特に制限を設けない。ただしメールやメッセージ、掲示板、SNS などを用いて、質問等を行ってはいけない。
- (3) 2, 3 の解答は横書きのワードファイルとして、デスクトップに置きなさい。
ファイル名は以下のようにして保存すること。
2 は 2-受験番号 (半角8 文字)
3 は 3-受験番号 (半角8 文字)
- (4) ワードの文書作成にあたっては、それぞれのファイルとも以下の書式 (A4 版) に従うこと。
- 1 行目には、受験番号を、中央揃え、12 ポイント MS ゴシックで入れること。
 - 解答には 12 ポイント MS 明朝 (日本語)、Century (英語) を用いること。
 - 各問題の設問について、どの設問の解答かがわかるよう、(1), (2), (3), ... と分けて解答すること。各設問の解答に必要なスペースは特に指定しないが、レイアウト等を工夫すること。
 - 解答のために参考にしたすべてのサイトの URL の一覧を、「参考にしたサイト」として、各ファイルの最後にまとめて列挙すること。
- (5) 提出物は以下のようなになる。
- 1 を選択した場合、解答用紙
 - 2 を選択した場合、ワードファイル (デスクトップに保存)
 - 3 を選択した場合、ワードファイル (デスクトップに保存)
 - 4 を選択した場合、解答用紙
 - 問題選択調査票 (必須)
- (6) 退出時にシャットダウンやログオフを絶対にしないこと。

平成 31 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

問題選択調査票

受験番号

--	--	--	--	--	--	--	--

選択した問題に○印を記入しなさい。

1	
2	
3	
4	

- 1 区間 $I = [a, b]$ で定義された関数 $f(x)$ について考える。 I の任意の 3 点 x_1, x_2, x_3 ($x_1 < x_2 < x_3$) に対して、常に不等式

$$\frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} \leq \frac{f(x_3) - f(x_2)}{x_3 - x_2} \quad (1.1)$$

が成立するとき、 $f(x)$ は区間 I において性質 (C) を持つという。

以下の問に答えよ。なお、以下の問の解答には解答用紙 1 を用いること。

問

- (1) $f(x)$ が区間 $I = [a, b]$ で性質 (C) を持つとする。このとき、任意の $x, y \in I$ と $0 < \theta < 1$ に対して、以下の不等式が成り立つことを示せ。

$$f(\theta x + (1 - \theta)y) \leq \theta f(x) + (1 - \theta)f(y) \quad (1.2)$$

- (2) $f(x)$ が区間 $I = [a, b]$ で性質 (C) を持つとする。 x_1, \dots, x_n は I に属する任意の点とし、 $\theta_1, \theta_2, \dots, \theta_n$ は $\theta_1 + \theta_2 + \dots + \theta_n = 1, 0 < \theta_i < 1$ ($i = 1, 2, \dots, n$) を満たす任意の数とする。以下の不等式が成り立つことを数学的帰納法により示せ。

$$f\left(\sum_{i=1}^n \theta_i x_i\right) \leq \sum_{i=1}^n \theta_i f(x_i) \quad (1.3)$$

- (3) $f(x)$ が区間 $I = [a, b]$ で連続、区間 (a, b) で 2 回微分可能な関数とする。このとき、もし $f''(x) \geq 0$ ならば $f(x)$ は区間 I で性質 (C) を持つことを示せ。
- (4) $g(x) = -\log x$ ($x > 0$) とおく。 $g(x)$ を利用して、任意の $x_1, x_2, \dots, x_n > 0$ に対して、以下の不等式が成り立つことを示せ。

$$\frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n} \geq (x_1 x_2 \dots x_n)^{\frac{1}{n}} \quad (1.4)$$

ただし、 $\log x$ は自然対数関数を表す。なお、自然対数の底 e が $e > 2.718$ であることは証明なしに用いて構わない。

平成 31 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科

人間情報コミュニケーションコース

推 薦 入 試

2 以下の英文 (1), (2) を読み, それぞれの問に答えよ。

(1)

著作物引用箇所のため非公開

(Adapted from Carter-Scott, *IF LIFE is a GAME, THESE are the RULES*. 1998)

問

1. (A)～(C)に入る英語の表現を文中から探して, そのままの形で答えよ。
2. には著者の主張が述べられているが, あなたならどのように書くか。50 字程度の日本語で答えよ。(最後に字数を示すこと)
3. 上の 2 のあなたの主張を 40 語程度の英語で書け。ただし, 日本語と英語が逐次対応している必要はない。(最後に語数を示すこと)

(2)

著作物引用箇所のため非公開

(Adapted from Asa Briggs & Peter Burke, *A social history of the media: from Gutenberg to the Internet*, Polity, 2002)

注

- D. L. LeMahieu アメリカの歴史学者
- Jeremy Black イギリスの歴史学者
- Boorstin アメリカの歴史学者

問

1. 下線部を全訳せよ。
2. 'convergence' は現代社会においてどのような意味で用いられるのか。本文に示された順に列挙せよ。

推薦入試

3 以下の文章を読んで後の問に答えよ。

統一されてある主体のあり方をよしとする風潮が、近代・現代社会では一般的ですし、また近代文学の研究も、それを見果てぬ理想として常に追究してきたということになるかと思えます。いわゆる近代的自我の理論ということになります。そしてそれは社会生活においては要求されることでしょう。要求されるということであって、常に実現しているとは全く言えません。文芸テキストは、社会のひずみを掘り下げるものです。統一的な主体というのは、実際には限界のある無理な要求です。私たちは、人に会うたび違う人毎に違う主体になっているでしょうし、TPOに応じて主体を使い分けているし、自分でもどうにもならないようなことが、毎日のように起こっているかと思えます。現代の文芸は当然そのことを取り上げています。自我が複数的なものであり、心は一枚岩ではないということは、二十世紀初頭から多くの思想家が異口同音に主張してきたことですが、そのことが最も顕著に表れているはずの文芸の研究において、そのことが明確に認められるということはこれまでなかったのではないのでしょうか。つまり自我とは、内部的にも外部的にも複数的であるということです。

これは教育にも大きく関わることですが、文芸テキストはこれまで社会における公序良俗の確立と普及のために利用され続けてきている気がします。特にこれは国語教育の中ではそうであったのではないのでしょうか。その意味では、いまだに啓蒙主義の時代と変わらず、啓蒙に対する信仰が自由な発想を妨げているのではないかと思われる部分があります。「完結した異論の余地のない結論を一方的に受容する読者は、自分で考えることをしない奴僕となる」。これはもちろん、先生方はじゅうじゅうご承知で常に実践されていることと思いますが、やはり児童生徒は自分で考えると言うことを身につけなければならないと思うのですね。

というわけで、調和しないテキスト現象に着目していく。テキストに現れる係争と、受容者側の係争（論述）とを取り上げて、統一されない複数的自我の対立と葛藤の場としてテキストをとらえる。そのような自我は、歴史的・社会的・イデオロギー的な様々な分裂した様相を示し、むしろそのような分裂・葛藤を描き出す方が、すぐれたテキストなのだと行うことができるのではないかと、評価基準の逆転ということになろうかと思えます。そしてまたそのようなテキストは、その形式においても、断片的で葛藤をはらんだものとなります。たとえば、小説のテキストが内部的に分裂し、多面的な構造になっていて、部分が断片化し、断片と断片とが相互に対立するモンタージュ構造になっている。そしてその断片と断片とが相互に批評する構造になっている、自己言及的な表現を実現したのが太宰治の作品であるというような見方になっています。

このような発想の転換の影響は大きなものがあります。これはつまり、陰に陽にこれまで文芸評価の基本を提供してきた、伝統的な美学に対して、変質を迫る性質のものだからです。何しろ、統一されたもの、まとまったものを評価するという感覚は、美学や文学を離れても、一般社会では自明の理のように思われてきたわけですから。この一見ばらばらなものがまとまって見えることを美

の理論として評価し、美学を打ち立てたのはバウムガルテンです。〈多様における統一〉とは、個々の部分が乱雑・対立しているように見えても、全体としては統一され、完全性・調和の相の下に見られることを言います。印象派とポスト印象派の間に、この〈多様における統一〉に関する切断面がある。美術においてはそこで近代と現代との飛躍が見られるということですね。ピカソなどの作品を見ると、全体として統一されてないんですね。個々ばらばらなものがばらばらにちりばめられているように見られる。

そのような現代芸術に対する理論、これを打ち立てたのが、テオドール・アドルノでした。〈多様における統一〉にノーを突きつけたのです。「意味を否定する芸術作品は、統一されたものでありながら混乱しているといった作品でなければならない」。断片とは、全体に回収されない部分のことを言います。その断片を集積したものがモンタージュということになります。そうするとテキストの総合的な理解が、テキストの断片性によって遠ざけられるということになるかと思えます。

もう一つ、このような作品の場合には、解釈に要求されるようなコンテキストの形成が容易に行われにくいということになります。文芸であろうがなかろうが、文章理解の場合、要求されるのが文脈を読めということなのです。当然のことなのですが、細部が断片化されていると、その細部は全体化できない。その場合、全体＝コンテキストは決して飽和しないということになってきます。そうすると、テキストの意味は一つに決まらないということになります。でも、もともと言葉の意味は一つには決して決まりません。これは国語教育に大きく関わる問題です。記号の意味は複数的となり、だからこそ小説や詩の読み方は決して収斂しゅううれんしません。世の中に、研究史が終わっているというような作品は、ただの一つもありません。そのことが何よりも、事実として意味の複数性を証立しょうたつてています。

コンテキストとは何かというと、テキストなんですよ、つまり。コンテキストはある文の前後の文・文章のことを言うので、コンテキストもテキストであるので、コンテキストも無数に考えられるんですね。ですからまたそれが断片を完全解釈することはありえない。そして、コンテキストは実体ではなく、解釈の結果なので、受容者や論者によって、その都度、形成されるようなものです。文芸テキストの意味の多数性・多様性はここにその根拠を持っています。現在に至るまでこれに関する議論は絶えません、私にはもはやこの議論は終わっていると思われまふ。文芸の意味は、収斂しない、解釈は終わらない、ということで、もういいでしょう。国語教育の分野でも、「読みのアナーキー」を否定する、というようなことを言う人がいますが、解釈はこれからもアナーキーで行くでしょう。解釈はどこまで行っても止まりません。止める者、たとえば教師とか権力者とかがどこかで止めない限り、文芸作品の新たな解釈は、この後も永遠に続いて行くことでしょう。それをどこかで止めるとしたら、それは解釈をリーダー、支配者の望む通りに決める、要するに全体主義ということになってしまいます。

ただし、これも重要なことなのですが、解釈の無限性は、解釈の恣意性とは異なります。解釈が無数にあるということは、解釈が恣意的であってよいということと決して同じではありません。正しい解釈を行うためには論証が必要であり、行われた解釈を正しいというためには検証が必要となります。つまり、嘘と本当とを区別するのは、検証あるのみなのであって、解釈においてもそのようなのです。それを行うためには、教育や訓練が不可欠です。論理学が必要なのですね。相対的に正し

い解釈と、正しくない解釈の区別は依然、有効です。

以上、ここまでのお話をまとめてみましょう。文芸研究とは何か、それは基礎学となるような、文献学・哲学・美学・言語学などの基盤の上に、あらゆる例外状態、これはつまり、言葉にできることの限界ということなので、自由な想像力の可能性を探究すること、これに外なりません。私が行ってきたのは、アレゴリーや、パラドックス、メタフィクション、モンタージュなどの現代的な観点を導入して、分裂や葛藤を否定しない芸術様式を評価することです。それに対応する文学教育とはどのようなことでしょうか。これももちろん、基礎的能力（読む・聞く・書く・話す）の修得の上に、どれほど学生・生徒・児童の言葉に対する感性を解発（リリース）しうるかを試みることではないでしょうか。文芸研究の現代的観点への留意はそれになると思います。これは、求心的な基盤、つまりこれはちゃんと覚えておかなければならないよということは当然ありますよね、これと、もう一方では、そこから離れて行って、言葉にできることはこんなにあるんだよという遠心的な実践、この求心的な基盤と遠心的な実践とを統一していくということが重要になってくると思います。

従いまして国語教育は、読む・聞く・書く・話すの基礎的な能力の育成と、自由な解釈の解発という車の両輪を、各段階に応じて課題として負っているということになります。これは、見方によってはあい矛盾する事柄かも知れません。一方では、規範に基づいた正確さを重視し、他方では、規範を打ち破る新規な発想が必須となるからです。一定のレベルに達した場合には、点数をつけることと、点数をつけられないということが同時に実践されなければならないわけで、これは一種のパラドックスということになるかも知れません。けれども、やはり何事も全体的なレベルによる限界があるので、初等・中等教育の場合には、この二つの事柄は、矛盾するというよりは相関的なものとなることが多いのではないかと思います。基礎的能力を身につけるということが、自由な想像力を解発することに繋がる^{つな}というものが、初等・中等教育の場合なのではないかと思います。

（本文は中村三春「現代の文学教育における言葉の強度―村上春樹・小川洋子・宮澤賢治作品を中心として―」『国語教育思想研究』2017による。なお一部字句などを削除・修正している）

注

- バウムガルデン アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテン。1714～1762。ドイツの思想家。
- テオドル・アドルノ 1903～1969。ドイツの哲学者、社会学者、音楽評論家、作曲家。
- ピカソ パブロ・ピカソ。1881～1973。スペインのマラガに生まれ、フランスで制作活動をした画家、素描家、彫刻家。

問

- (1) 本文の主張を 100 字以内で要約せよ。
- (2) 自由な想像力の解発と基礎的な能力の育成について、あなたの考えを 800 字以内で論述せよ。

推 薦 入 試

4 解答用紙 4 にある「部品」をすべて用いて「はじめ」の図形または絵を作り，そこから「おわり」の図形までを連続した 10 以上のイメージでつなげよ。ただし「はじめ」と「おわり」はイメージ数に含まない。

つながりは「意味的」「視覚的」あるいはその両方によるものとし，つながりが明確になるよう矢印や文章を用いて補足してもよい。

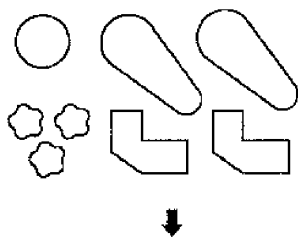
下書き用紙

4

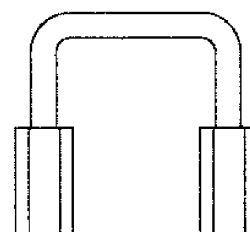
受験番号

--	--	--	--	--	--	--	--

部品



はじめ



おわり